

「松野城跡石碑」完成



平成 26 年 11 月 3 日(文化の日)、静岡市葵区松野の「別所平」という丘陵上には、古来、「松野城」という城郭が伝承されていた。『駿河記』に、「城山 別所の辺なり。里人云、むかし別所殿、川島殿、ボッカア殿とて三人の武士居城の地なり。ぼっかおとは里人の訛言にて誤りあるべし。武人の伝絶えて事蹟時代未詳」とある。さらに、『駿国雑誌』・『安倍郡美和村誌』等に「武田家領国の時、滅亡するものか、詳ならず」とあることは、どうも永禄 12 年(1569)、武田信玄の駿河侵攻に際して討たれたのか、また本地を離れたのか、安否を気遣った村人たちは正月に餅を搗くことなく食べないという習慣が現在もあるという。

前述すように、江戸後期からの地誌類、そして伝え受け継がれてきた口承文学ともいえる文化財的資料は、代替わりすることにだんだん薄れ無くなってしまふことを危惧したのが、地元有志で立ち上げた松野城址右保存会である。会員 100 名を越えるまとめ役の望月久徳会長は、今年に入り計画を進め、地権者の承諾、賛助金による建設費の捻出(周辺整備含む)、そして地元への啓発活動と積極的に活動を通して筆者も参加させていただいた。9 月には、「安部山の戦後史と松野城」と題して口承文学を継承しながら、近年の「村の城」、「領主の権力空間」という新たな視点を取り入れの話は、好評にて賛同を得た。また、城跡名については「松野城跡 伝承地」としていただき、この度の完成式典に至ったことは、地域文化を継承し掘り起こす大変意義深いことであった。



松源寺(増善寺住持)での式典と、喜びを語る望月徳久会長。

記・静岡古城研究会
水野 茂



松野城について

平成 26 年 9 月 23 日、筆者の「安部山の戦国史と松野城」講演記録から簡潔に見ていきたい。

松野城は、旧静岡市を南北に流れる安倍川中流域西岸の松野集落背後に位置し、広大な別所平という丘陵上の北西最深部に築かれていた(『静岡県の
中世城館跡』・他)。まず当該の抗争史は、
前述の永禄 12 年(1569)武田信玄の駿河
侵攻に際して安部山(安倍郡)では安倍一
揆衆の蜂起で一年間にわたり戦場とな
る。しかし、筆者は永享から文明年間
(1429・1469-)の「安部山知行」とあるよ
うに(『満濟准后日記)、ここは狩野氏の領地
であったが、長期にわたる今川氏と対
立、そして滅亡に至り没収・解体され
た地域と考えている。狩野氏との関わ
りと、その機能・活用は下記の『駿河
記』等の記述からから類推できる。



- 1 ぼっかわ殿・別所殿・川島殿という当地三武将の一次史料は一切見出せない。滅亡したか。
- 2 別所平の松野阿弥陀堂(お薬師さんとして広く信仰)には平安後期の阿弥陀如来像が祀られる。
- 3 松野阿弥陀堂は古く松野城背後の「黒山」に祀られ、下段の同城には長福寺があったという。
- 4 周辺「城山」(所在不明)・「別所」・「公林」(領主の公地)・「町屋原」地名から領主権力的な空間が推定できる。



まず、大型の阿弥陀さんを建立し、周辺には「別所」とする別院などを集落化した大寺院であったことが推定できることは、安部山を支配した大勢力の狩野氏の極楽往生を保障する来世への聖域空間であった。さらに、「黒山」とは「クロ」と同意語で端・結界を



現し、草刈り場(戦場)での有力者、また村人たちの飛散する避難地の「山籠もり」・「山小屋」であったとする見解がある(黒田日出男『結界の中世・象徴の中世』)。村人たちが避難する山小屋が、いつの間にか「城山」になった可能性が高く、これも城郭の一形態であることは間違えない。こうした見解を鑑みれば、狩野氏の聖域的権力構造が導き出される。『宗長手記』に戦いの要因は記さないが、「狩野介謀反。此山中甲州につづき、せめ入がたくして三ケ年、・・・悉責ほろぼす」とあり、文明年間に狩野氏は滅亡した。その後の安部山は今川氏の守護領として狩野氏領は没収・解体され、安部山一帯に同氏の本地・あまり事跡が分からないことも補完要因となろう。今後、民俗学、宗教学という多分野からの研究が待たれる興味深い地域といえる。

